

「明石」巻の「海人の子」をめぐる覚書：散逸『あま人』物語のことなど

辛島，正雄

<https://doi.org/10.15017/2559330>

出版情報：文学研究. 97, pp.19-40, 2000-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「明石」巻の「海人の子」をめぐる覚書

— 散逸『あま入』物語のことなど —

辛 島 正 雄

以前、筆者は、今井源衛先生のお手伝いで、小学館版新編日本古典文学全集『源氏物語①』『⑥』のために旧「全集」本六冊を改訂する準備の仕事をさせていただいたことがあったのだが、本稿は、そのおりに気づいたことを、整理・敷衍したものである。脱稿は、一九九四年一月に遡るが、諸般の事情により発表を見送っていたものである。その間に、「新編全集」本の当該分冊②が、一九九五年一月には無事刊行のはこびとなり、以下に問題とする箇所にも、

都には「京童^{きやうどう}」と呼ばれる噂ずきの若者たちがいるが、海辺の明石にも同類はいそうだと、「海人の子」と表現した。(二五八頁)

と、私見を踏まえた頭注が、すでに施されている。このような次第であるので、また、以下の考察が旧「全集」本を熟読する機会を得てはじめてなしたものであったこともあり、この期に及んだ加筆・修正は最小限とし、「源氏物語」の引用についても、脱稿時のまま、旧「全集」本によることとした。

一 「もの言ひさがなき海人の子」について

『源氏物語』『明石』巻において、八月「十三日の月のはなやかにさし出でたる」(②二四四頁)夜、光源氏は明石の入道に誘われるまま、その娘とはじめての逢瀬をもった。とはいえ、「かうあながちなりける契りを思すにも、浅

からずあはれ」とは思うものの、「人に知られじ」(②二四七頁)との配慮から、別れをゆつくり惜しむこともできないのであった。

この「人に知られじ」とは、謹慎中の身の上を思つてのことであるが、より直接的には、すぐあとの記述に、「二条の君の、風の伝てにも漏り聞きたまはむことは、戯れにても心の隔てありけると思ひうとまれたてまつらんは、心苦しう恥づかしう思さるるも」(②二四八頁)とあるごとく、京に残した紫の上への聞こえが憚られるものらしい。そのため、後朝の文の使いから、その後の訪れについても、以下に描かれるような状況となつた。

(源氏ノ) 御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。ここ(入道ノホウ)にも、かかる事いかで漏らさじとつつみて、御使ことごとしうもてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんとし思憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを、げに、いかならむと、入道も極楽の願ひをば忘れて、ただこの御気色を待つことにはす。今さらに心を乱るも、いといとほしげなり。(②二四八頁)

入道の娘としては、貴公子光源氏に憧れる気持はそれとして、二人の身分の隔絶ゆえに、親の結婚のすすめにも容易に従わず、逢うことをのばしのばしにしてきた果てに、予想どおり、身のほどを思い知らされる扱いを受ける結果になつたと、今さらのように後悔される。いっぽう、源氏は源氏で、紫の上を裏切つたことへの自責の念に堪えかねて、自らの行状をほめかし、許しを請うような手紙を送るしまつである。事態は拮据して、なかなか複雑・微妙であるようなのだが、ただ、その間の表現そのものは、深刻さに沈湎してしまうようなことはなく、源氏の態度に対しては、「あいなき御心の鬼なりや」とか、「あながちなる御心ざしのほどなりかし」(②二四八頁)といった、語り手のからかいめいたことが目につき、入道の心労についても、揶揄的な筆づかいは一貫している。

そうしたなか、源氏の態度を叙して、「おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんとし思憚るほどを」

という一節が現れる。一読、文意は明瞭であり、とくに問題もなさそうに思われるのだが、「もの言ひさがなき海人の子」という言いまわしには、よく考えると、いささかひつかかるものがありはしないか。この些細な違和感にこだわって、まずは、右の表現のよってところを明らかにすることから始めたい。

※

ひつかかるのは、ただ一点、なぜ「海人」でなくて「海人の子」とあるのか——これだけである。どうしてこれが疑問であるのかは、おいおい明らかになるであろう。

「もの言ひさがなき海人の子」という物語の本文は、『源氏物語大成』に掲げる校異によるかぎり、注意すべき異文等も見当たらない。注釈史的には、『花鳥余情』に、

人の物いひさかにくき世をといへるうたの詞也（『源氏物語古注集成』本一〇七頁）と注しているのが独特で、それを承けて、『弄花抄』『休聞抄』『岷江入楚』等では、

ここにしも何にほふらんをみなへし人の物いひさがにくきよに（『拾遺和歌集』卷十七・雜秋・僧正遍昭・一〇九八番以下、和歌の引用は『新編国歌大観』による）

の歌を引いている。もつとも、この典拠説はその後まったく顧みられず、今日では用いられることもないので、解釈の現状を知るために、近代の代表的な注釈書等での扱いを、以下に列挙しておく（傍線箇所をそれぞれの略称として以下に用いる）。

I 「日本古典全書」本②一九三頁頭注（三）

自然口さがない海士の子がゐて見とがめはしないかと遠慮して通はずにをられると、……

II 池田亀鑑編『源氏物語事典上巻』「あまのこ」の項（待井新一氏執筆）二七頁

源氏は明石の上に通うことになるが、人の噂をはばかりて遠慮する時には、女の方は嘆き悲しむ。うるさい世間

の口という意で、土地柄から海人の子といった。

Ⅲ 「日本古典文学大系」本②八四頁頭注三

「口の悪い海士（海士の子）などでも、交って居るのであろうか（そんな者どもに、見咎められでもしたら困る）」と、源氏が遠慮して、通わない間を、……

Ⅳ 玉上琢弥著「源氏物語評釈第三巻」二二三頁現代語訳

自然口さがない海人の子なども居るかも知れないと、ついお控えになる事もあるとだえを、……

V 「日本古典文学全集」本②二四八頁現代語訳

しぜん口さがない土地の者も徘徊しているかもしれないと、気がねをなさって少し夜離れの重なる折もあるのを、……

Ⅵ 「新潮日本古典集成」本②二九二頁頭注二

距離も少し遠いので、途中に自然口さがない土地の若者もうろろしているかもしれないと気をお遣いになって、お通いも控えめなのを。「海士の子」は、歌語。

Ⅶ 「新日本古典文学大系」本②——注せず。

※

「もの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんと」という表現に向きあったとき、まずひっかかるのは、文脈からいえば、ここは、「もの言ひさがなき者どもや立ちまじらんと」程度の言いまわしで、なんの不都合もなかったのではないか、ということである。これ以前に、光源氏が入道の娘の返事をはじめて受け取ったさいには、「京のことおぼえて、をかしと見たまへど、うちしきりて遣はさむも、人目つつましかれば」（②二四〇頁）と、いたって常識的な表現が用いられていた。それだけに、ここに限って「海人の子」となっているのが、どうしても気になるのである。

その疑問に対してもつとも説得力があるのは、『事典』に「土地柄から海人の子といった」とする説明であろう。『全集』と『集成』が「土地の者」とか「土地の若者」と訳しているのは、それを承けたものとおぼしい。ただし、「土地柄から」というならば、むしろ「もの言ひさがなき海人どももや立ちまじらんと」とでもあるほうが、より順当なのではあるまいか。

『源氏物語』全編で三十一例を数える「海人」の語は、「全用例のうちの十九例は、源氏が須磨、明石にいた時、またその時に関係のあるもの」(『事典』「あま」の項(石田譲二氏執筆)二五頁)であり、「須磨」「明石」両巻を読むさい、かなり目に立つことばである。その「海人」のありさまについては、源氏が須磨から明石に移ったおりの記述に、

小止みなかりし空のけしき、なごりなく澄みわたりて、あさりする海人どもほこらしげなり。須磨はいと心細く、海人の岩屋もまれなりしを、人しげき厭ひはしたまひしかど、ここは、また、さまことにあはれなること多くて、

よろづに思し慰まる。(②二二六―二二七頁)

とあり、人けのない須磨とは違つて、明石には「海人ども」が大勢暮らしているという。そうすると、そのような環境にあつて、源氏は自らのプライバシーを守りたいと願っているわけだから、それを侵害しそうな厄介者がいるとすれば、当然それは「もの言ひさがなき海人(ども)」ということになりそうなのなのである。須磨にいたおりのことだが、朧月夜に贈った源氏の歌に、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかなが思はん(②一八一頁)

とあるのは、そうした事情をよく反映している。それを、わざわざ「海人の子」と表現するのはなぜか。残念ながら、諸注はこの疑問に答えてくれない。そんななか、『集成』が「土地の若者」と解しているのは、「……の子」という表現に唯一留意したものととして注目されるが、「口」がない土地の若者」と訳して、そこにいかなるニュアンスがこもるものであるかは、なお明らかでない。

※

いっぽう、「海人の子」の用例は、『源氏物語』中に三例が拾えるにすぎない。うち二例は「夕顔」巻の所出。後者は前者を承けるものである。

- (1) (源氏ガ)「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」と、のたまへど、(夕顔ハ)「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。(①二三六頁)

- (2) (源氏ノコトバ)なほいとなむあやしき。などてその人と知られじとは隠いたまへりしぞ。まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔てたまひしかばなむつらかりし。(①二五七―二五八頁)

- (1)に見える「海人の子なれば」は、『和漢朗詠集』巻下(遊女・海人詠・七三番)などに見える古歌、しらなみのよするなぎさによをすぐすあまのこなればやどもさだめず

の第四句を引いたもの(『新古今和歌集』巻十八・雑下・よみ人しらず・一七〇三番。第三句「よをつくす」。卑しい「海人の子」(のごとき身の上)ゆえ、「名のり」するに値しない、との意である。先に『集成』が「海人の子」に「歌語」である旨注記していたのは、こうした用例の存在を念頭においてのことなのであろう(『角川古語大辞典』でも、「あまのこ」の項の第二義として、まず「歌語」と注し、「しらなみの」の歌により「氏・素性もない者のたとえにいう」と説明する。用例には「夕顔」巻の(1)の例のほか、『八雲御抄』巻三に所見の語であることが指摘される)。ただし、歌ことばとしての「海人の子」の用例は、右の「しらなみの」の歌のほかは、『万葉集』巻五に、

あさりする阿末能古等母とひとはいへどみるにしらえぬうまひとのこと(八五七番)

が拾える以外、古いものがない(下って、『為忠家初度百首』に「遊女」の題で三首に「海人の子」が詠みこまれているのが目立つが、『六百番歌合』でも「寄遊女恋」「寄海人恋」両題のもと、前者に家隆の一首があるのみである)。「海人」の例ならば枚

挙に違がないのであるが、「海人の子」となると、「源氏物語」の時点ではんとうに歌ことばとして定着していたのか、疑問なしとしない。むしろ「海人の子」という表現は、「しらなみの」の歌とストレートに結びつく可能性のほうが高そうに思われる。時代は下がるが、『連珠合璧集』下巻にも、「海士子トアラバ」として「しらなみの」の歌を掲げている（『中世の文学』所収本一二九頁。ただし、これは「夕顔」巻を背景とする寄合である）。

「夕顔」巻の場合、「海人の子なれば」は引歌表現であり、「海人の子」はそのかたちでの出現が確実に保証されていた。しかし、「明石」巻の場合、事情がまったく異なる。「海人の子」の語は「しらなみの」の歌を想起させるが、それを思い浮かべて読むような文脈ではないのである。そこで、『集成』の説くように「歌語」と理解すれば、「海人の子」は用例数の多い「海人」とほぼ同義で、「……の子」にはたいした意味はないということになるのであるか。『大系』が「口の悪い海士（海士の子）などでも」と注しているのは、そのような理解にも見える。すると、『集成』が「土地の若者」と訳しているのも、原文に忠実を期したまでのことであつたのだろうか。

かりに「海人の子」が「海人」というのと大差ない表現であるとすれば、「もの言ひさがなき海人」という言いまわしが気になるのだが、『海人』は口さがないものといった決まり文句があつたかどうかは、定かでない。ただ、

・海人ども漁りして、貝つ物持て参れるを、召し出でて御覧す。浦に年経るさまざま問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行く方は同じこと、何かことなると、（源氏ハ）あはれに見たまふ。（『須磨』巻②二〇五―二〇六頁）

・あやしき海人どもなどの、貴き人おはする所とて、集まり参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、え追ひも払はず。（『明石』巻②二八頁）

といった表現から、『海人ども』は「さへづる」もの」と捉えられていたことがわかる。このことは、源氏じしんのちに、

にはかなる御饗応と騒ぎて、鵜飼ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。〔松風〕巻②四〇八頁）と回想していて、印象的なものであったらしいことが知られる。

これらを総合すると、源氏が「海人ども」と接したとき、その「さへづり」——耳馴れぬことばでの多弁・饒舌——こそが、深い印象をとどめるものであった。とすれば、そんな「海人ども」が大勢いるなかに身を置いて暮らす今、わが身に重大な秘密が生じたとすれば、それを知られて「さへづら」れることを危惧するのも、いたって自然な感情であったといえよう。「もの言ひさがなき海人」という表現のありようには、それなりの必然性が認められる。と同時に、そのような説明をもつてしても、「もの言ひさがなき海人の子」という表現の由来は、依然説きおおせたといえないのである。

※

ところで、「海人の子」にかかる「もの言ひさがなき」という修飾句であるが、そもそも『源氏物語』には、世人の口さがなさという表現が少なくない。

- (a) 忍びたまひける隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ。〔帚木〕巻①二二九頁
- (b) 人のもの言ひを憚りたまひつつ、うちとけたまふべき御気色もなければ、……〔朝顔〕巻②四六八頁
- (c) 世の人の口さがなさを思し知りにかば、かつはさぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、……〔朝顔〕巻②四七七―四七八頁
- (d) 世の人聞きに、しばしこのこと出ださじ、と切に籠めたまへど、口さがなきものは世の人なりけり。自然に言ひ漏らしつつ、やうやう聞こえ出でくるを、……〔行幸〕巻③三二二頁
- (e) わが心ひとつにかう強う思ふとも、人のもの言ひいかならん、……〔夕霧〕巻④三九八頁
- (f) 人のもの言ひ隠れなき世なれば、おのづから聞きあはせて、隔てけると思さむがいと苦しければ、……〔夕霧〕

右の諸例以外にも、「人笑はれ」「人笑へ」「人あなづられ」といったことが全編に多出するが、それも、世間の口さがなさを前提に、そこで取り沙汰されることを恐れる気持が強いからである。「行幸」巻(d)の「口さがなきものは世の人なりけり」など、そのまま箴言として通用しそうだ。そうした世間体を極度に重んずる都での生活の様態が明石の地での生活に置き換えられれば、源氏にとつては、自分を取り巻く「海人ども」こそが、都での「世の人」に相当することになるのであろう。「事典」の説明は、そうした事情を汲んだものと推察される。とはいえ、何度も繰り返すが、それでもなお、「もの言ひさがなき海人ども」といった表現は予想できても、「……海人の子」とすべき必然性は見当たらないのである。どうして、「海人の子」なのか。

※

ここに、その謎を解く鍵となりそうな重要な用例がある。やはり、「夕顔」巻。

忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり。(①二四三―二四四頁)

夕顔がなにがしの院の妖物にとり殺されたおりの、狼狽する光源氏の心中である。源氏は、わがふるまいの軽率を思い、当然ながら、世の聞こえを憚る。そのなかに、「よからぬ童べの口ずさび」なるものがあつた。

これについて、萩原広道「源氏物語評釈」は、「後世にはゆる京童のくちずさみ也」と説き、「集成」も、「京童べ。平安京の無頼の若者たち」(①一五四頁頭注六)と注する。「童べ」とあつても、「少年ではなく、口さがない嗜好きの連中の意」(「全集」①二四四頁頭注一)である。

「京童べ」の語は、広道のように「後世」といわずとも、「源氏物語」と前後して、「うつは物語」や「栄花物語」などに見えている。

・この（上野）みこ、よろづに思ほし騒ぎて、陰陽師かうなぎ博打京わらははべ姫翁召し集めて宣はくは、……（「うつほ物語」『藤原の君』巻『角川文庫』本④九五頁）

・京童のきこゆるは、……（同『九七頁』）

・かゝる程に、世の中の京童べ方分きて、とりぐの、しり、人の国までゆきていさかひの、しりけり。（『栄花物語』「初花」巻〔日本古典文学大系〕本④二四七頁）

・今昔、忠明ト云フ検非違使有ケリ。若男ニテ有ケル時、清水ノ橋殿ニシテ京童部ト諍ラシケリ。京童部刀ヲ拔テ忠明ヲ立籠メテ殺サムトシケレバ、忠明モ刀ヲ拔テ御堂ノ方様ニ逃ルニ、御堂ノ東ノ妻ニ、京童部数立テ向ケレバ、其ノ方ヘニ否不逃ズシテ、鄙ノ本ノ有ケルヲ取テ、脇ニ挾テ、前ノ谷ニ踊落ルニ、……其ヨリ逃テ去ニケリ。京童部ハ谷ヲ見下シテ奇異ガリテナム立並テ見ケル。忠明京童部ノ刀ヲ拔テ立向ケル時、御堂ノ方ニ向テ、「観音助ケ給ヘ」ト申ケレバ、「偏ニ此レ其ノ故也」トナム思ヒケル。（『今昔物語集』巻十九・四十話〔日本古典文学全集〕本②六四九―六五〇頁）

思うに、「もの言ひさがなき海人の子」とは、「世の人の口さがなさ」のような一般的・非限定的な言いかたではなく、「よからぬ童べの口ずさび」に相応する表現なのではなかったか。前述のごとく、鄙の地明石では、「海人ども」こそが、京の「世の人」に相当しよう。京で「世の人」の注目的であつた光源氏は、明石でも「海人ども」の注視に曝されざるをえない。そのようななか、ことさら「海人の子」の「もの言ひさがな」さが危惧されるとあれば、それはちょうど、京ならば京「童べの口ずさび」を憚るケースだといっているのではあるまいか。「海人の子」という表現をとるのは、「京童べ」が「童べ」なる語と結びついていることと関連しよう。と同時に、それが周知の和歌に出るひとまとまりのことばでもあることが、その語の出現をより違和感なからしめてもいる。試みに、人聞きを憚る表現の型を地域別に整理すれば、次のようになる。

場所	一般的な場合		特殊な場合
京	口さがなき世の人		よからぬ童べの口ずさび
明石	さへづる海人ども	もの言ひさがなき海人の子	

以上から、「もの言ひさがなき海人の子」という表現には、次のようなニュアンスがあったと考えたい。

〈光源氏が抱えた秘密——謹慎中の身でありながら、鄙の地で、変わり者の入道の婿となったこと——は、「京」ならば、「よからぬ童べの口ずさび」——悪童たちによつて絶好のスキヤンダル種とされそうながらであつたが、ここは海辺の僻地「明石」ゆえ、「京童べ」そのものは存在しない。とはいえ、それに相当しそうな厄介者はここにもいる。そこで、周囲にいる「海人ども」——これが「京」ならば「世の人」に当たる——の中でも、若く血の氣が多くて、噂話には目のない奴ら、といった氣持から、「京童べ」をもじつて「海人の子」と表現した——と。

二 明石の物語と散逸『あま入』物語と

「もの言ひさがなき海人の子」という表現の由来については、右のように考えることで説明できるように思うのだが、「海人の子」ということばの出現に関しては、なおこだわつてみたい問題が存する。

『源氏物語』中の「海人の子」の用例については、「明石」巻一例のほか、「夕顔」巻に二例あることは、すでに触れたとおりである。そこでは、知られた古歌が踏まえられているのだが、それは、たんに古歌を引いたというにとどまらず、背後に古物語の世界までもが横たわっているらしいのである。

前記「しらなみの」の歌をめぐつては、それを作中歌にもつ作り物語が存在したことが知られ、『風葉和歌集』巻

「明石」巻の「海人の子」をめぐる覚書

十八・雑三に、次のように採られている。

なにはわたりにて見あひける人の、宿をとひはべりければよめる

あま人のむすめ

白浪のよするなぎさに世をへつつあまのこなれば宿も定めず（一三五三番）

また、『宝物集』巻五に、

ナニハノ浦ノアマハ、十六年ト云ニ、願ノ力ニ依テ、兼光ノ少将ノ妻トナリタリトコソハ、アマノ物語ニハ申タムメレ。（新日本古典文学大系「本二五一頁」）

とあるのも、同じ物語のことらしい。

この散逸「あま」物語の内容等については、三角洋一「『あま』の成立と趣向」（『中古文学』21号、一九七八年四月）。のちに、同氏著『物語の変貌』（一九九六年、若草書房）所収に詳しい。ここでは、

「あまの子」のたとえば女が事情あつてか身を恥じてか名のらない場合、男が身分を問わないで理想の女を求める場合に引かれるものであつた。そして、「白浪の」の歌をふくむ「あま」は身分違いの恋を描く物語であつて、世をはかなんだあまが願を立てて入水し転生して貴公子に添いとげるといふ、身を恥じる女が身分にこだわって悔やむ男と結ばれる物語であつたはずである。「あまの子なれば名のるに足らず」「あまの子なりとも思ひ妻にせん」といふ世のたとえが、「あま」にもとづいているといえるのではないか。（四八―四九頁）

のごとき推測がなされており、「夕顔」巻は、「あま」を下敷きにした物語として読む必要があるらしいのである。三角氏は、同じ巻の(2)の例についても、

「さばかりに思ふ」とは……たわむれとは考えず二世の縁を誓うほどに愛したというのである。ここに「あま」の投影を読みとつて、源氏があまの子の死を悼む兼光（あま）ノ主人公ノ名——辛島注）になぞらえられている

と見ることもできない。できるならば、そう読みとりたいのである。（四八頁）

と述べている。

ここで、同じ「海人の子」の語が現れる「明石」巻あたりにも、「あま人」の影があるのではないか、といえ、突飛にすぎるであらうか。もちろん、ここに出る「海人の子」という表現のもつニュアンスは右に説いたごとくであり、文脈上、「しらなみの」の歌、ひいては古物語の世界を想起せねばならぬいわれは、まったくない。しかし、それでもなお、「海人の子」とあれば「しらなみの」の歌はおのずと想起されないわけにはゆかないだろうし、この一文を契機にして広く明石の入道一族にまつわる物語の内容に目を向ければ、これは「あま人」の換骨奪胎であったか、と思われてくるのである。

※

まず、なによりも、明石の入道の娘の人物造型、とりわけその思惟の特徴が、「あま人」の世界へと連想を誘う。

周知のごとく、入道の娘は、おのが「身のほど」を思い、そのプライドを守るためには、親のすすめる高貴な男との結婚を拒むことも辞さない。そのあたりの物語本文を、抜き出してみる。

Aこのむすめすぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。身のありさまを、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。

（「須磨」巻②二〇三頁）

B正身は、おしなべての人だにめやすきは見えぬ世界に、世にはかかる人もおはしけりと見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いとはるかにぞ思ひきこえける。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、似げなきことかなと思ふに、ただなるよりはものあはれなり。（「明石」巻②二二八―二二九頁）

C内に入りて（源氏へノ返歌ヲ）そそのかせど、むすめはさらに聞かず。いと恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥づかしうつつましう、人の御ほどわが身のほど思ふにこよなくて、心地あしとて寄り臥しぬ。

（同②三三八頁）

D（源氏ノ文ヲ）めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ、なかなか世にあるものと尋ね知りたまふにつけて、涙ぐまれて、さらに、例の、動なきを、……（同②三三九頁）

E（娘ノ心）「いと口惜しき際の田舎人こそ、仮りに下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん。かく及びなき心を思へる親たちも、世ごもりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ」と思ひて、「ただこの浦におはせんほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそおろかならね。年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまをほのかにも見たてまつらんなど思ひかけざりし御住まひにて、まほならねど、ほのかにも見たてまつり、世になきものと聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかかなからで、かくまで世にあるものと思したづぬるなどこそ、かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ」など思ふに、いよいよ恥づかしうて、つゆもけ近きことは思ひ寄らず。（同②二四三―二四四頁）

このように繰り返される娘の思惟は、男との身分の隔絶を嘆く「あま入」の娘の思いとも、重なりあうものが少なくないように思われるのである。

「夕顔」巻では、『風葉和歌集』にも出る歌を踏まえて、「かの『あま入』の娘のごとく、名のるに足らぬ卑しい身の上」と光源氏に答える夕顔であったが、「明石」巻の入道の娘は、はじめての源氏からの文に対しては、気後れして、Bのように返事も書けず、ようやく翌日の文に返歌をする。わが身のほどを意識するあまり、すすんで自らを語ろうとはしないところに、三者に共通するモチーフが見出される。

ところで、お伽草子の『あま物語』は、散逸『あま入』の面影をとどめる改作物語であると目され、『風葉和歌集』所載歌も含まれているが、そこには、「とし十五六はかりなるあま」（室町時代物語大成）所収本五三七頁。以下、『あま物語』の引用は本書による）が、「さこんの中將、たいらのかねみつ」（五三六頁）の召しに対して、「さきのよに、いかなる、つみのあはれは、よにあさましき、あまのことなりて、かゝるうきめをかつくらん、おなし人とむまれは、よにます人の、ふさひとも、なりなん」と「くときなき」、

かすならぬ、あまのこともと、むまれきて、かゝるうきめを、かつくくやしさ

と詠む場面があり（五三八頁）、また、

うきしつむ、なにはのうらの、あまはた、身のかすならぬ、ねをのみそなく（五四〇頁）

といった歌も見える。これらがそのまま散逸『あま入』にあったという保証はないが、Eの「かかる海人の中に朽ちぬる身」などとする卑屈な自己認識には、『あま入』にも『あま物語』と似たような、海人である身を嘆く描写があつて、そこからの投影があるのではないか、とも思われる。

同じEには、「いと口惜しき際の田舎人こそ、仮りに下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ」との思考が見える。ここで思い浮かべられているのが、具体的にどのような話を指すのかは明らかにしたいし、「おそらく、当時地方のあちこちにそんな話や噂がたくさんあつたのだろう」（『評釈』二二四頁鑑賞）と説かれてもいるが、『あま入』の娘の場合（とくに、入水に到るまでの悲劇）なども、その典型的な先例として、想起されるに十分のものであっただろう。

また、父の入道が、娘の貴人との結婚を神仏に祈っているのも、『あま入』の娘が主人公と添い遂げることを祈念するのと、その思いの切実さにおいて、相通ずるものが感じられる。娘が入水する物語前半のクライマックスを、『あま物語』では、

八月十五夜の月も、我ながら、ものすこくして、夜もふけかたに、人しれず、しのひいて、日比、みをきたる、うみのはたへゆきて、その身を、しつめんと、するとき、にしにむかひて、こゝろゆくほとに、ねんふつ申て、いふやうは、今一たひ、中將殿に、こんしやうにて、むまれあはせ給へと、きねんして、ゆひをくひきり、ぬきおく、きぬのつまに、かやうにそ、かきおきける

うき身とて、ちひろのそこに、いるとても、たれかはつけん、くものうへまで

この世にて、きみをみるめの、かたければ、こんよのあまと、なりてかつかん
と、かきつけておき、うみにいりぬ（五四四頁）

と描いているのであるが、『あま入』でも、似たような場面は、かならずや存在したはずである。そう思つて見ると、Aのような、不本意な状況に陥つた場合には「海の底にも入りなむ」と考える（これは入道の指示でもあり、はやく「若紫」巻に、「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」（①二七八頁）と遺言している旨見え、「明石」巻では、源氏に、「命の限りはせばき衣にもはぐくみはべりなむ。かくながら見捨てはべりなば、浪の中にもまじり失せね」となん掟てはべる」（②三三五頁）と、入道じしんが語っている）、いささか常軌を逸した思い込みよう（入道が源氏に語る場面では、「すべてまねぶべくもあらぬ事ども」（②三三五頁）と評される）も、悲願成就のため娘が入水する『あま入』の設定から派生したものと考えることで、より納得しやすくなるのではあるまいか。その後、源氏の通いが間遠であるため、娘は、「思ひしもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する」（②二五〇頁）。あくまで「身も投げつべき」であつて、『あま入』の二の舞は回避されるとはいえ、入道の娘の気持としては、ほとんど『あま入』の娘の運命の再現との思いであつたろう。源氏の帰京を目前にした娘の歌に、

年へつる苦屋も荒れてうき波のかへるかたにや身をたぐへまし（②二五七頁）

とあるのも、同様の思いである。また、入道が源氏に、「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりは

べりぬ」(二三四―三五頁)と、現在に到る歳月をことさら強調するあたりも、前掲『宝物集』に「十六年ト云ニ、願ノ力ニ依テ」と見える年数(『あま物語』末尾にも「ことし十六ねんに、なり候へとも、水からか事を、へんしもわすれたまはねは」(五五二頁)とある)と、無縁ではないかもしれない。

※

ついながら、右の『あま物語』の二首の歌のうち、「この世にて」の歌は、すでに三角氏に指摘のあるごとく(前掲論文五〇頁)、『古今和歌六帖』第五・「こむよ」に見える古歌(三三〇番。第三句「かたからば」)であるが、あるいは散逸「あま」の作中歌でもあったかと思われる。というのも、『夜の寢覚』巻四の、寢覚の上に執着する帝の文に、

鳩の海や潮干にあらぬかひなさはみるめかづかむかたのなきかな

来む世の海人(『日本古典文学全集』本三五二頁)

とあって、その第四句が引かれているのだが、ここの帝の激情は、生まれ変わってでも添い遂げたいとする「あま」の娘の執念に重ねあわせたもの、と理解することで、そのリアリティは格段に増すように思われるからである。また、この歌は、『狭衣物語』巻三でも、

来む世の蜚となりても更に潜かではやむまじき御有様に、少しもよからざらむ人を夢にも見ま憂ければ、……

(『日本古典全書』本①六三頁)

と、源氏の宮に執着する狭衣の心中思惟に引かれている。さらに、『夕顔』巻で、光源氏が隣家の御嶽精進の声を聞きながら、「この世とのみは思はざりけり」と語り、

優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな

と「行く先の御頼め」をする(①二三二頁)のも、「この世にて」の歌、ならびに「あま」の内容と無関係ではない

であろう。往時、『あま入』は、われわれの想像を超えて、熱心に享受されていたようなのである。

※

さて、帰京が近づいた頃の光源氏の歌に、

このたびは立ちわかるとも藻塩やくけぶりは同じかたになびかむ(②二五四頁)

とある。これは、『あま物語』の「かねみつ」が帰京の前に詠んだ歌、

いまはとて、たちのほるとも、つのくにの、なにはのうらの、あまはわすれし(五四一頁)

と似ていなくもない。偶然だとしても、気にはなるのである。

「落標」巻に入り、入道の娘が源氏との間の女兒を産んだとき、源氏は、「などで、京に迎へてかかる事をもせざりけむ、と口惜しう思」(②二七五頁)したり、「かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしかたじけなくもあるべきかな」(②二七六頁)と思ったりする。同様のことを、入道も、妻と娘が上京するおりに、「若君の、かう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむもいとかたじけなう、契りことにおぼえたまへば」(「松風」巻②三九五頁)と語っている。これらは、『あま物語』において、海人の娘が、「かねみつ」の帰京後、その子を身ごもったことに気づき、「こをうみて、かやうに、いやしきあまの中に、そたて□^{をかんも}みも、みくるしかるへし、人も、あまのことこそ、いはんすらめ、た、うみたてまつらぬさきに、身をなきものに、ならはや」(五四三―五四四頁)と考えて入水し、のちに転生して「かねみつ」の妻となったおりに、「身はた、ならず、なりしかは、すてに七月に、なりぬれば、きみの御こそ、いやしきあまのなかに、そたてまいらせん事、有かたし、なか／＼とおもひて、なみのそこに、身をしつめまいらせ候へは」(五五一頁)と説明しているような事情を想起させる。貴人の子を卑賤の女が産むさいの困難を見据えて、それぞれの対処こそ違え、両者よく似た認識を示しているように思われるのである。

さらに、同じ「濡標」巻、住吉で源氏と入道の娘とが行きあったおり、娘は、

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ(②二九七頁)

と詠む。ここに見える「なにはのこと」という表現に関しては、三角氏が、『あま物語』に「なにはのこと」という表現が頻出するの注目し、「恐らく「なにはのこと」の歌ないし趣向は『あま』にもあつたろうし、これが導火線となって爆発的な流行を生んだと想像したい」(五四頁)と述べており、注意される。この推測に従えば、入道の娘の歌に「なにはのこと」とあるのも、『あま』に触発された表現である可能性が出てくるのである。

※

思いつくままに列挙してきたが、ここで両者の対応関係を整理してみたい。『あま』の推定される内容(復原資料に乏しいので、『あま物語』により補充できそうな点は積極的に採用した)と、それに対応しそうな『源氏物語』の内容とを、それぞれの展開に沿って示し、A〜L(a〜l)の記号により対応関係が明らかになるようにした。

【あま人】	【源氏物語】
A少将(『あま物語』デハ中将)兼光、難波の浦で海人夫婦の一人娘を見そめる B宿を問う兼光に、娘は、「海人の子なれば宿も定めず」と答える C娘は兼光との身分差を嘆く D兼光、娘と深く契る	g①明石の入道は、一人娘の高貴の人との結婚を「十八年」間神仏に祈念、③かなわぬ場合は「海に入りね」と訓戒 a前右大将の源氏は、かねて入道の一人娘の噂を聞いていた k源氏、須磨で絵日記を記し、のちに紫の上と眺め、往時を偲ぶ

E 兼光、帰京を促す帝の宣旨により、都に戻る、形見の袖

F 娘、兼光の子を身ごもる

G 娘、①この世で兼光と添い遂げることを願い、また

②子が申し海人のなかで育つことを願い、③入水

H 娘、悲願かない、右大臣の娘として生まれ変わる

I 娘、「十六年」を経て兼光の北の方となり、一男・

一女をもうける

J 兼光、海人の娘の思い出を、語り草にする

K 兼光に絵草子を見せ、北の方は海人の娘の生まれ変わ
りであることを明かす

L のちに、姫君は入内、所生の皇子が即位、後の位につく

c 娘は源氏との身分差を痛感

b 源氏からの文に、娘は容易に返事が書けない

d 源氏、娘と契る

j 源氏、娘との関係が「海人の子」の噂となることを
危惧

g ③娘、源氏の訪れないことに、「身も投げつべき
心地」を味わう

f 娘、源氏の子を身ごもる

e 源氏、召還の宣旨が下り、帰京、形見の琴きんと衣

i 娘、一女をもうけ、京に迎えられる

g ②姫君は、母の身分の卑しさゆえ、紫の上に預けら
れる

l のちに、姫君は春宮参り、春宮即位により中宮とな
り、所生の第一皇子は立坊

h 娘、中宮の母として重んじられ、忍従の日々が報わ
れる

g ③宿願を果たした入道は、入山

このようにして見ると、身分違いの男女の仲らいを宿命的に描いた物語として、「あま入」と明石の物語とは、思いのほか近似していたといえるのではなからうか。「あま入」では、娘の生まれ変わってでも男と連れ添いたいとする執念こそが物語の推進力であったが、それを、明石の入道の奇怪な宿願というかたちに変奏しつつ、その娘に自尊と自卑との狭間で激しい葛藤を演じさせたところに、明石の物語の真骨頂がある。「あま入」は明石の物語において徹底的に消化・吸収し尽くされ、そのあらわな模倣の跡は容易には見出しがたいものの、高貴な男と卑しい女とがかわる場合の基本的な趣向や意味づけは、やはり重なりあう点が多いのである。

※

「あま入」という物語の題号について、三角氏は、「あま物語」に見える贈答歌、

(娘) かすならぬ、身にもおもひの、ある物を、あはれくやしき、そらたのめかな

(かねみつ) ことはりや、我はくもゐの、うへにすむ、あま入なれや、いかゝたのまん(五四〇頁)。

が「あま入」にもあつて、ここから出たものであらう、と推測している。娘の歌に「虚頼め」とあるのを「空」と解し、「かねみつ」は「雲居の上に住む天人」と応じるわけであるが、「あま入」にはもちろん「蜚人」が掛けられており、「この懸詞に身分違いの恋という前半の主題がになわれてい」(前掲論文五三頁)る(ちなみに、漢語「天人」は上代以来アメヒトと訓むのが通例だが、ここは掛詞である関係上、アマヒトでなければ困る)。こうした題号のもつ両義性が、人物設定においても、貴／賤・男／女という両極に定位・構造化されているのは、この物語の注目すべき特徴であるが、〈雲上人／海人〉という対比は、そのまま光源氏と入道の娘との関係の基本でもあつた。そう思つて見ると、娘の詠んだ、

かきつめてあまのたく藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ(②二五四頁)

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけてしのばん(②二五六頁)

といった歌からも、「あま入」の面影は、かすかに立ち現れてくるようである。

三 おわりに

一見、その理解になんの困難もなさそうな「もの言ひさがなき海人の子」という表現に着目して、「海人の子」なることばの出自を探索するとき、それが「夕顔」巻にすでに見えたことばであること、そのことばは「しらなみの」の歌と緊密に結びついていること、それら二つが相俟って、失われた古物語「あま入」をここへと呼び戻すこととなった。そして、「あま入」と明石の物語とを対比してみた結果、この古物語が、今日まで絶えて指摘されることのなかった、明石の物語の有力な先蹤の一つであることを確認するに到ったのである。

「もの言ひさがなき海人の子……」といった表現じたいは、おそらく作者にとつて、単発的に一種のことば遊びをしたにすぎないものであろう。とはいえ、「あま入」がそのあたりの粉本であつたとすれば、直接には関係のないことばの選択に微妙な影響を及ぼすことも、あながちありえぬことではなからう。そうすると、読者にとつて、明石の物語が「あま入」のバリエーションでもあることに気づくためには、「海人の子」の一語は、かろうじて本文上に露头した、ほとんど唯一の手がかりなのであつた。

「あま入」と「あま物語」との関係がいかなるものであるかは、なお慎重な検討を要するが、「あま入」が「源氏物語」に影響を及ぼした事実については、三角氏の指摘にかかる「夕顔」巻のみならず、明石の物語にもそれがあつたことを述べたのである。おそらく、影響の深さということでは「夕顔」巻の比ではないのであつて、そのことが本稿で明らかになったとすれば、幸いである。